

経済産業省「デジタル時代の人材政策に関する検討会」

試験ワーキンググループ：議事要旨

1) 情報処理技術者試験の目的・役割の再確認

試験の目的については、表現について多少の見直しが必要な可能性もあるが、記載された内容で概ね同意が得られた。

2) 情報処理技術者試験制度の各区分の機能

(主な委員意見)

- 今後は基本情報技術者試験 (FE) 相当がすべての社会人に必要なレベルになるのではないか。デジタル時代においては、レベル2の位置づけが変わる可能性がある。
- 応用情報技術者試験 (AP) はデジタル時代に多能工として活躍する上での知識・技能を問うのに適した試験である。
- 情報セキュリティに関しては、すべての社会人に必須の知識のほか、ユーザ部門がDXを推進する際などに求められるレベルの知識もあり、これを区分して考えることが必要ではないか。
- 情報セキュリティマネジメント試験 (SG) の「対象者」として「情報セキュリティ担当に任命された者」と記載されているが、やや受け身の印象を受けるため、「事業部門やビジネスのセキュリティを保つ者」などの前向きな表現にしていただけるとよい。
- 各区分のイメージについて異論はないが、細かい表現等については、適宜見直しをしていただけるとよい。学校教育における情報教育との関係については、カリキュラムとの整合を取る必要があり、これは今後の課題としたい。

3) 「新たな日常」を踏まえた試験の在り方

(主な委員意見)

- 2年後に新たな制度を実施する場合、1年前にはサンプル問題などを教材の出版社や学校等に示す必要があり、それに向けた検討・問題作成の時間などを考慮すると、かなり急な話という印象を受ける。
- 午前問題と午後問題は分けて考える必要がある。午前問題を CBT (Computer Based Testing) 化・IBT (Internet Based Testing) 化することは可能であると思われるが、情報処理技術者試験の特色は午後問題にあり、そこに価値が認められていると考えている。午前問題については、一定の範囲の知識を習得できたかどうかを測ることで

ばよいのではないか。

- IBT 化に当たっては、なりすまし受験への対策や監視機能としてどのような対策が可能なのかなどについて、情報があれば、ぜひ聞きたいところである。
- CBT 化や IBT 化を考える際に、個人によって異なる問題が出題される IRT (Item Response Theory : 項目応答理論) を導入するかどうか、大きなポイントとなる。不正対策としても、IRT の導入が重要である。問題を非公開とした上で、IRT を導入し、個人によって異なる問題が出題されるようにすれば、不正の問題をある程度防ぐことができるのではないか。逆に IRT を導入しなければ、自宅受験は難しいと考えている。
- 問題の公開は、ある程度は必要である。これまでは、過去の問題が公表されることにより、それが教材として活用されるという流れがあったが、今回の CBT 化により、その流れがやや弱まっているため、現状を変えたいと思っている。
- IRT の導入が、今回の最も重要なポイントではないか。また、IRT を導入しても、問題の一定数を公開すれば、それが教材として活用される。過去問の丸暗記ではない本質的な学習を促すためにも、ある程度問題は公開した方がよい。
- 試験制度の改革は、受験者のコスト負担にも影響する可能性がある。例えば、自宅受験時に、受験者が監視カメラを用意する必要があるかもしれない。

4) 今後の工程について

(主な委員意見)

- 全体的なビジョンを描き、体制も検討した上で、2年後までに何をするかという検討を行う必要がある。2年後に可能な範囲に限ると、小規模の改善になってしまうおそれがある。また、法令上の対応が必要な変革まで踏み込むのかどうかという論点もある。
- 全体構想の下で、具体的なアクションプランを検討してから、その実現可能性を議論する必要がある。

指摘を受け、事務局より以下の発言があった。

- 変化の早い時代の要請に応えることが求められており、そのような観点でまずは2年後を目標とさせていただいた。抜本的な変革を実現する長期的なロードマップの通過点として2年後があると考えていただけるとよい。情報処理技術者試験の良さを残しながら、新たな時代に即した形を検討していきたい。

以上